

---

# ノスタルジア

さら

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ノスタルジア

### 【Nコード】

N1093V

### 【作者名】

さら

### 【あらすじ】

いくつもの季節を一緒に過ごしてきた、幼なじみの3人。そのひとりが欠けた時、残されたふたりの想いは……？

バスの窓から海が見えた。

かすかに吹き込む潮風が、汐里の肩にかかる髪を揺らす。

「……大丈夫？」

隣に座る汐里につぶやく。うつろな顔つきで窓の外を眺めていた汐里が、ほんの少し微笑み僕に答える。

「大丈夫……だけど、ちよつと酔っちゃった」

小さい頃から、乗り物に弱かった汐里。

「もうすぐ着くよ」

僕の声に汐里がうなづく。

そう。もうすぐ着く。僕と彼女とあいつの、思い出の場所に……。

海は少し荒れていた。海水浴シーズンだったが、ここは遊泳禁止だから、砂浜を散歩する人が一人二人いるだけだ。

汐里は右手で髪を押さえ、海を見ながらつぶやいた。

「……変わってないね。ここ」

そしてゆっくりと、隣に立つ僕を見つめる。

汐里こそ、変わっていない。少し上目使いのその視線も、返事を待つ時のちよつと首をかしげるしぐさも……。

「そうだね」

僕の答えに満足するように、汐里がそつと微笑んだ。

あの海に行こうと誘ったのは、汐里の方だった。僕は「うん」と答えていいのか戸惑った。実際今でも、汐里をここへ連れてきてよかったのか、答えは出ない。

突然パニックに陥って、泣き出すなんてことはなくなったようだけれど、汐里の心の傷が癒えたとは、まだ思っていなかったから。

「あの時は……蓮くんもいたのよね」

汐里の口から出たその名前に、景色が一瞬、ゆがむように動く。

「蓮くんと、柊ちゃんと、三人で来たのよね」

汐里がそう言っただけで海を見た。

ああ、そうだよ。そうだよ、汐里。

だけどここに蓮はいない。

僕と汐里の前から蓮がいなくなってもう三年、いや、まだ三年というべきだろうか……。

汐里と僕と蓮は、幼い頃から仲が良かった。

幼稚園と小学校は一緒に通った。中学生になってさすがに汐里は、僕たちと行動することが少なくなった。

だけどたまに誰かの家で勉強したり、夏休みに一日だけ三人で出かけたりすることが、秘密の約束みたいになっていた。

中学三年生のその夏も、僕らはバスで三十分ほどの海へ、遊びに行く計画を立てていた。

「じゃああたし、お弁当作っていくね」

「汐里の弁当なんか食えるのかよ」

「もうっ。蓮くんは失礼ね。毎年あたしのサンドイッチ食べてるくせに」

汐里が怒ったように頬をふくらませ、蓮がその顔をからかっている。

僕はそんな二人のやりとりを、見ているのが好きだった。

自信家で、何事もまっすぐ突き進む蓮は、はたから見たらちよつと生意気なヤツだったけど、僕は嫌いではなかった。

実は人知れず、陰で努力している蓮を、僕は知っていたから。そしてそんな蓮のことを、汐里もわかっていたんだと思う。

「俺、汐里のこと、好きだな」

汐里が団地の階段を上って行った後、僕に向かって蓮が言った。

「聞いているのか、柊斗。俺、汐里のことが、好きだって言ったんだ」  
同じ言葉、何回も言うな。それに今さら、重大発言のようにそう  
言われても、別に僕は驚かない。

「知ってるよ。そんなこと」

僕の隣に立つ蓮の向こうに、住み慣れた団地が並んでいる。そしてその後ろには、どこか懐かしい色の夕陽が見えた。

「……じゃあ、いいのか？」

「なにが？」

「俺が、汐里に言っちゃっていいのか？」

「言いたかったら言えればいいだろう？　僕には関係ない」

蓮がふっと笑い、僕に念を押す。

「あとになって言うなよ？　実は僕も好きだったなんて、絶対言うなよ？」

「言わないよ」

「言うなら、今ここで言え」

「……絶対、言わない」

にらむような目つきの蓮が、にやりと歯を見せ、僕の肩をぽんと叩く。

「よしっ！　んじゃ、俺と汐里がうまくいくように協力してくれよな！」

夏の始まりの蒸し暑い風。じんわり汗のにじむ制服の背中。

蓮の見慣れた顔は、ほんのり夕陽色に染まっていた。

汐里と最初に仲良くなったのは僕だった。仲良くなったと言っても、そのきっかけなんて覚えていない。

ただ同じ団地に住んでいて、毎日同じ公園で遊んでいたから、自然と親しくなったんだろう。

汐里はお姉さんのようにしっかりしていて、僕の母はよく汐里のことを褒めていた。

そしてそんな僕らの住む団地に、蓮が引っ越してきて、いつのまにか僕らは三人で遊ぶようになっていた。

「うわぁ、気持ちいいー」

バスの中ではぐったりしていたくせに、海に着いた途端、汐里は波打ち際へ駆け寄った。

「やっぱり水着持ってくればよかったかなあ」

「だから言ったら？ 夏は絶対海水浴だって」

蓮が僕の隣で汐里に言う。

海に行く計画を立てたけど、汐里は「水着になりたくない」と駄々をこねて、海水浴に反対した。だから僕たちはわざわざ、遊泳禁止の海岸を選んで、ピクニックという名目に変更したのだ。

「汐里の水着姿なんて、誰も見たくねえけどな」

「ちよっと！ 蓮くん、ひどいっ」

汐里が麦わら帽子をはずして、蓮を叩くしぐさをする。蓮は大げさに逃げ回って、二人の笑い声がひと気のない砂浜に響く。

僕はいつものように、そんな二人を眺めていた。それは別に、悪い気分ではなかった。

「柊ちゃん」

ぼんやり突っ立っている僕に汐里が気づき、荷物を抱えて駆け寄ってくる。

「おべんと、食べようよ」

「……うん」

「俺、腹減ったー！」

「蓮くんの分はないんだからねっ」

汐里が言って、僕に振り向き笑いかける。そんな汐里の笑顔を見たら、僕の胸がちよっとだけ痛んだ。

「はい。柊ちゃんもタマゴサンドだね？」

汐里が僕の前にサンドイッチを差し出す。

「柊斗はタマゴしか食わねえからな」

蓮がすでに二つ目のサンドイッチを頬張りながら、口をはさむ。

「うるさいな。好きなんだからいいだろ」

「そうよ、蓮くんはうるさいの。でもトマトサンドも食べてね？」

好き嫌いはダメだよ、柊ちゃん」

汐里の年上口調に、蓮がにやにやと笑っている。

僕は黙って、汐里の作ったタマゴサンドを口に入れる。いつものようにほんの少し、僕には塩味がきつかった。

波打ち際で石を投げたりしながら、なんとなく時間を過ごした。

夏の日差しは眩しく、潮の香りが鼻につく。

いつしか汐里と蓮は並んでいて、僕は後ろから二人を眺めた。蓮と約束した時間が近づいていた。

「今、何時？」

突然蓮が言う。

「あ、もう三時。あたし塾があるから、そろそろ帰らなきゃ」

汐里が塾に通っていることは知っていた。この日も休むつもりがないということも知っていた。

蓮がちらりと僕を見る。僕はそれに反応するかのように口を開く。

「じゃあ、バスの時間見てくるよ。この辺、本数少ないから」

「あ、それじゃ、あたしも……」

「いいよ。汐里は蓮と待ってて」

僕は二人に背中を向けて、逃げるように走り出す。

サンダルで熱い砂を蹴り、じやりじやりした階段を上り、国道に出てから砂浜を見下ろした。

波打ち際で、蓮が汐里と話している。予定通りだ。汐里はなんて返事をするのだろう。

ぼんやりとした頭でバス停の数字を眺める。バスの時刻は記憶してあった。だからそんなものを調べる必要なんてなかった。

二人が話し終わるまで、時間をつぶす。じりじりと焼けつくような陽射しが、肌を焦がす。

あの日のあの時間は、永遠に続くかと思うほど、僕にとって長い時間だった。

蓮と汐里の会話がどんなだったのか、僕は今でも知らない。ただその夏が終わる頃、二人は恋人同士になっていた。

学校でも、二人のことは噂になった。秋が過ぎ、冬が過ぎ、春が来る頃、二人は同じ高校に合格した。僕は違う学校だった。

「高校別でも、<sup>ウチ</sup>団地は同じだもんね」

いつでも会えるよって、卒業式の日、汐里は言ったけど、僕と汐里が会うことはめっきり少なくなかった。

春の夜、近所のコンビニで蓮に会った。

汐里とはうまくやっているそうだ。キスもしたし、それ以上の関係になるのも、時間の問題だなんて僕に言った。

「いいんだろ？ 柊斗」

ポケットに手をつっこんで、コンビニの袋をぶら下げながら、蓮は僕の隣をついてくる。桜の花びらがはらはらと、僕らの上に舞い落ちる。

「いいんだよな？ 俺が汐里とやっても」

「いちいち僕に聞くなよ」

「じゃあ絶対なしだぞ？ 実は僕も好きでしたとか言うの」「しつこい」

蓮が軽く笑って夜空を見上げる。何気なく隣を向くと、蓮の口元が目に入った。

この唇で、蓮は汐里にキスをした……。



僕はそれ以上のことを想像してしまいそうになり、あわててその場から走り出す。

「先帰る！」

「え、なんだよ急に。どうせ同じ場所に帰るんだろ？」

「急いでるからっ。じゃあな！」

逃げるなよと、蓮が言ったような気がする。だけど僕は振り向かずに、花びらを踏みつけながら、ただ走った。

その日から、僕は蓮を避けるようになっていた。もしかしたら汐里のことも避けていたのかもしれない。

会う機会が少なくなったのではなく、僕の方から汐里のことを避けるようになっていたのだ。

久しぶりに汐里と話したのは、雪がかすかにちらつく高三の冬だった。

僕は予備校からの帰りで、汐里は薄暗くなった団地の前で蓮が来るのを待っていた。

「バイクの免許取ったからって、毎日友達とどこか行っちゃうの」  
男友達と遊ぶのが忙しくて、相手をしてくれない蓮のことを、汐里は白い息を吐きながら不満そうに話した。

「汐里も乗せてもらえぼ？」

「やだあ、怖いよ。酔っちゃいそうだし」

「バイクで酔うかな？」

僕の前で汐里が笑う。少し控え目な汐里の笑顔は、昔と変わっていないかった。

「じゃあ……」

その場を去ろうとした僕に、汐里がつぶやく。

「帰っちゃうの？」

ゆっくりと振り返ると、僕のことを見つめている汐里と目が合っ

た。

「帰っちゃうの？ 柊ちゃん」

「ここで一緒に、汐里の彼氏を待ってろと？」

「そんなじゃないけど」

汐里は照れたように、ほんのりと微笑む。冷たい空気が、汐里の周りだけ温まったような気がした。

「うそうそ、ごめんね。バイバイ、柊ちゃん」

僕に向かって汐里が手を振る。

「……風邪ひくなよ」

それだけ言って背中を向けた。

バイクの音はまだ聞こえない。汐里は小雪の舞う中、いつまで蓮の帰りを待っているのだろう。

そんなことを思いながら、ふと振り返ると、汐里はもう僕の姿を見ていなかった。

暗闇の中に視線を向けて、マフラーを口元まで押し上げて、寒さに耐えるように立っている汐里。

あの時駆け寄って、一緒にいてあげれば……何かは少し、変わっていただろうか。

僕が部屋に入りかけた頃、蓮のバイクの音が遠くで聞こえた。僕はそのままドアを閉める。だけど次の瞬間、ただ事ではない音を聞いて、あわてて外へ飛び出した。

団地の前の道路で、車とバイクが事故っているのが三階から見えた。

どれほどの衝撃を受けたのか、車のフロント部分はぐしゃぐしゃで、少し離れたところにバイクが倒れていた。

「……蓮？」

大勢の人が集まってきた。横たわったまま動かない人間が、蓮だということぐらい、遠くからでもわかる。

かすかに汐里の泣き叫ぶ声が、僕の耳に聞こえてきた。

強い海風が吹いた。汐里は海を見つめたまま、髪を押さえる。三年前のあの日から、汐里は家に籠りがちになった。

事故のショックで、時々パニックを起こしたり、突然泣き出したりすることがあると人づてに聞いた。

だけど、僕には何もできない。

何を言っても、何をしても、それは嘘っぽいような気がして……。なぜなら、僕は嘘つきだから。最後の最後まで、僕は蓮に、嘘をつき通していたから。

「柊ちゃん。久しぶりだね」

汐里が僕の家を訪ねてきたのは、引っ越しの荷造りをしている最中だった。

この団地は老朽化のため、近いうちに取り壊されることになっていて、僕たち家族は父親の実家の近くに引っ越す準備をしていたのだ。

「海に行かない？」

「え？」

「一緒に、あの海に……行ってくれない？」

なぜ急に、汐里は僕を誘ったのか。僕が引っ越したら、今度こそ本当に会えなくなるから、幼なじみとしての社交辞令みたいなものだろうか。

それとも何かもっと他の意味が……あるのだろうか。

海を見ていた汐里が振り向き、僕を見た。

「柊ちゃん」

「なに？」

「……大丈夫？」

汐里の口から出た言葉は、思ってもみない言葉だった。

「大丈夫なの？ 柊ちゃん」

「……なにが？」

汐里がかすかに微笑む。そして小さく深呼吸してからつぶやいた。  
「柊ちゃん、泣いてないでしょ？ 蓮くんが逝っちゃってから」

胸の奥がざわめき出す。密かに閉じ込めておいた気持ちが、今にも溢れそうになる。

「泣いてもいいよ？」

汐里の声が波の音と重なる。

「泣いてもいいんだよ？ 柊ちゃん」

泣けるわけなんて、ないだろう？ 嘘つきで、意気地なしで、逃げてばかりだった僕が、蓮のために泣けるわけなんて……ないだろう？

汐里の細い手がずっと伸びて、僕の背中を抱き寄せる。

「汐里……だめだよ」

「大丈夫。蓮くんは全部わかってるから」

わかってる……蓮くんは全部わかってる。

その途端、言葉にならない想いが、涙と共に溢れ出た。

蓮は全部わかっていた。今も、昔も、蓮は僕の気持ちを、全部わかっていた。

「ごめん……汐里」

「柊ちゃん……」

「ごめんな……蓮」

蓮はきつと空の上から、勝ち誇ったように笑っているだろう。

ほらみろ、やっぱりお前も、好きだったんだろって……。

汐里の息づかいが耳元で聞こえる。好きな子の胸で泣くなんて、カッコ悪すぎる。

声をかけることなく、そっと汐里のことを見守っていたつもりが、見守られていたのは僕のほうだったなんて……。

僕は頼りない手で、汐里の体を抱きしめた。その体は、思ったよ

りもずっとずっと柔らかくて、細くて、そして震えていた。

帰りのバスの中、汐里は僕の肩にもたれて眠ってしまった。長いまつ毛の先には涙のあとが光っているが、安心したようなその表情に、僕も静かに目を閉じる。

「蓮くんがいなくなってから、眠りたくても眠れなくなっちゃったの」

さっき僕の隣で、はにかむように汐里は言った。

僕も同じだよ。だけど今日からはちよつと違う。汐里のおかげで、僕はほんの少し前へ進めたから。

バスは海から離れ街中を走る。

僕は明日、この町を去る。汐里も近いうちに、あの団地を出るのだろう。汐里がその後どこで暮らすのか、僕は知らない。

「柊ちゃん」

いつの間にか目を開けていた汐里が僕にささやく。

「元気だね」

「汐里も……」

バスから降りて僕らは別れた。

汐里は古びた団地の階段を、一段ずつ上っていく。

「汐里」

誰にも気づかれないうちに、その名前をつぶやいた。あたりは夕陽に染まっている。

「ずっと……好きだった」

聞こえるはずのない僕の声。なのに汐里は、階段の途中で振り返り、僕に小さく笑いかける。

——ありがとう。

汐里の口元が、そう動いた気がした。

あれからさらに八年が経とうとしている。

何年ぶりに訪れたこの町は、ずいぶん様変わりしていた。

さっきバスの窓から見たあの団地の跡には、いつの間にか大型のショッピングセンターができていて、昔の面影は跡形もなく消えてしまった。

だけど——この場所だけは変わっていない。

八月の焼けつくような陽射し。白く波立つ海。ひと気の少ない砂浜。

この場所だけは、あの頃と何も変わっていなかった。

「……汐里？」

バスを降り、国道から砂浜を見下ろしていた僕は、波打ち際に立つ人影に目を凝らした。

背中を向けていたけれど、ほっそりとした体の線も、柔らかそうな髪質も、背の高さも雰囲気も、僕が一度だけ抱きしめたことのある汐里と、とてもよく似ていた。

「ママあー」

かすかに子どもの声がする。波打ち際の彼女が振り返り、よちよち歩きで近づいてきた子どもを満面の笑顔で抱きしめる。

子どもの後ろから、男の人が歩いてきた。彼女と何か会話を交わし、子どもを真ん中にして、三人手をつないで歩いてゆく。

小首をかしげるようにして、彼と話をしている彼女。子どもに見せる穏やかな微笑み。

彼女は——いや、汐里は、とても幸せそうに見えた。

「柊斗ー」

僕の背中に声がかかる。ペットボトルを大事そうに抱えた僕の彼女が、真夏の太陽の下を駆けてくる。

「そこの自販機、ポカリ売り切れだったー」

そう言いながら、ポカリスエットを目の前にかざす彼女。その額には汗がにじんでいる。

「だからコンビニまで行ってきた」

「コンビニまで？ 他のものでいいのに」

「いいの、いいの。あたしも飲みたかったし」

にっこり笑って、彼女が隣でキャップを開ける。こくんと喉を鳴らして一口飲むと、はいっ、と僕の前に差し出した。

「サンキュ」

「どういたしまして」

冷たいポカリスエットを口の中へ流し込む。それと一緒に、高ぶりかけていた想いも、すうっと喉の奥へ吸い込まれていった。

「気持ちいいねー。やっぱり水着持ってくればよかったかなあ」

潮風に短い髪をなびかせながら、海に向かって彼女が言う。

「ここは泳いじゃいけないんだよ」

「そうなのー？ じゃあ、今度は泳げる海に行こうよ」

「そうだね」

「あたし、お弁当作ってあげる！」

はしゃぐようにそう言って、僕に笑いかける彼女。この笑顔に、僕は今まで救われてきた。

「サンドイッチがいいな」

「タマゴサンドでしょ？ わかってる」

どちらともなく指を絡ませ、見つめ合って笑い合う。今度は僕が、彼女を幸せにしてあげる番だ。

手をつないで二人で歩いた。一度だけ振り返った海辺に、汐里の姿はもうなかった。

——汐里が幸せなら、それでいい。お前だって、そう思ってるんだろ？

ふと見上げた夏の空。真っ白な入道雲の向こうで、蓮が満足そう

に、笑っているような気がした。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1093v/>

---

ノスタルジア

2011年7月23日03時21分発行